

四万十川の達人たち=四万十川に『四万十リバーマスター』在り！=

清流通信読者の皆様こんにちは。

皆様は『四万十リバーマスター』という“四万十川の達人たち”をご存じでしょうか？ 四万十川流域に住むふるさとを愛する人々で結成された『四万十リバーマスター』は、四万十川流域を訪れる方々に川遊びのポイントや危険箇所を教えたり、環境保全のアドバイスをしたりと、ボランティアで活動する“四万十川の達人たち”のことです。

“四万十リバーマスター”

平成13年、高知県は四万十川流域で日常的に四万十川と接している方々の中から110名を選び『四万十リバーマスター』として育成し、河川を利用する人々に知ってもらいたい情報、観光で訪れた方々が知りたい情報などを提供する、『四万十リバーマスター制度』を発足させた。そして、平成16年からは(財)四万十川財団がこの事業を引き継ぎ、現在、四万十川財団理事長より委嘱された95名の『四万十リバーマスター』が、四万十川流域で活動している。このリバーマスターの方々の職業は、川漁師・農業・流域で商店を営む者・公務員とまちまちではあるが、四万十川を想う気持ちには一致して深いものがある。



中半家沈下橋からは、抜水橋・JR予土線鉄橋が見える

“四万十リバーマスターの想い”

それまで東から西に流れていた四万十川がS字に大きく蛇行し、その進路を太平洋側に変える地点、四万十市西土佐半家。川漁師体験民宿を営む『四万十リバーマスター』麻田満良さんの家は、四万十川が眼下に広がる中半家沈下橋のたもとにある。生まれてからずっと四万十川を見続けてきたという麻田さんの本業は土木建築士で、一昨年からは、四万十川を訪ねてくる方々にこの川の魅力をより深く知ってもらいたいと、川漁師体験民宿も始めた。

「もう十年以上も前に、この前の沈下橋下の河原で大学生の若者が野宿をしようとした。聞いてみたら、川漁なんかちっともやったことがないのにウナギやアユを釣ってみたいとか言いよる。それやったら教えちゃろうと、うちに泊めて教えた。それからつきあいが始まって、働き出しても毎年来よる。そんな事がきっかけで体験民宿も始めた。」 四万十川の魅力をもっとたくさ



人生の要所要所で四万十川が関わってきたと語る麻田さん

んの人々に知ってもらいたい、それが四万十川の保全にも必ず役に立つはずだと、麻田さんは語る。

“四万十川に誓う”

昭和58年NHK特集「土佐四万十川～清流と魚と人と～」の中で、『日本最後の清流』と紹介されてから、四万十川は全国区となった。しかし残念ながら近年、水量が少ない・水が汚れている・アユが少なくなった…等、四万十川の悲鳴が聞こえるような話題が多くなってきた。そして、年一回開かれる『四万十リバーマスター連絡会』のなかでも、話題のほとんどが“最近の憂うべき四万十川の環境問題”に終始することも事実だ。

「わしら子供の頃の四万十川は、こじゃんと(とても)キレイだった。水中めがねでこっちの岸から向こう岸まで見透せた。」 因みに『こっちの岸から向こう岸』まで架かる中半家沈下橋は126m。いかに美しい川であったかが、うかがい知れるエピソードだ。

しかし、今の四万十川はといえば…。 「もうそんな川には戻らないのでしょうか？」 そんな不安げな私の表情を察してか、麻田さんは力強く言い切った。

「四万十川に関わる人はみんな思うちゅう、昔の四万十川に戻りたいと。わしらあは昔の四万十川を知ちゅうき、よけい思うがあよ、こんな四万十川はいかんと。四万十川に元のようにアユ・ウナギ・カニが戻らんといかん！ みんなで力を合わせたら、いつかは出来ると思うちゅう。その為の四万十リバーマスターやと思うちゅうき。」

取材の後で、中半家沈下橋に降りてみた。水量は少ないが、冬の川の水は澄んでいて、“向こう岸が見透せた”という、過去の四万十川の透明度を彷彿とさせるようだった。この川から多くを学んだという麻田さん。「冬は水がきれいなけんどねえ…」と言いながら川面を見つめる麻田さんの横顔からは、『必ずいつか、あのキレイだった四万十川に戻してやるから！』と、四万十川に誓うような、そういう強い決意のようなものが伝わってくるようだった。



夏場多くの観光客が訪れる中半家沈下橋



遠くのハヤの群れ(中央)が見えるほど